

「オフ・ミュージアム」での鑑賞体験

武居利史

美術においては、作品に近づいて視線を向けるという鑑賞者自身の積極的な行為がなければ鑑賞は成り立たない。音楽や演劇のようなパフォーミング・アーツは作品の上演中、観客には静止していることが要求され、鑑賞はもっぱら受身の状態で行われる。そのような特徴から、音楽や演劇は時間の芸術であり、美術は空間の芸術とみなされることが多い。しかし、美術においても鑑賞行為にはある一定の時間というものが必要であり、美術が時間を必要としないというわけではない。ただ、美術鑑賞の場合、いつ、どのくらいの時間をかけるかが鑑賞者の側の判断に大きく委ねられているというところに、多くのパフォーミング・アーツ作品とは大きく異なる特徴がある。

さて、一般的に美術館とそこで開かれる展覧会は、もっとも効率的に美術鑑賞を行えるよう産み出された制度ともいえる。「親たい」という人々の欲望を、手軽に充たすために効果的に設計された制度といえるかもしれない。私たちは美術館の入り口にえだり通じけ、あととは苦勞もせずに作品を観ることができ。ホワイトキューブの展示空間では、作品と作品のあいだに余計なものは存在しない。集められた作品の中から、私たちは親たいのだけをじっくり観ればよい。鑑賞のための合理的な装置、それが美術館である。現代の鑑賞者は、みなその効率性に慣れきっている。

しかし、今回の屋外展示では、そのような効率的な鑑賞は期待すべくもない。「オフ・ミュージアム」といえば聞こえは良いが、それは表現する側の野心的な試みではあったとしても、鑑賞する側にとってはあらかじめ不便さを覚悟しなければならない面倒な企画だ。展示を観ようとする者は、まずサイトマップを入手し、親たい作品の位置を確認し、適切な経路を選択して、移動しなければならない。そして作品を見発したら、その周囲を巡ったりして、何ごとかを感じたり、考えたりしなければならない。それら一連の行為は、美術館での効率的な鑑賞とは対極的なものといえるだろう。

まず、作品と向き合っている時間よりは、移動に費やしている時間のほうが長い。この移動という時間は、果たして鑑賞とは関係ないものなのだろうか。そんなことはない。作品を目指して移動するとき、その作品の鑑賞行為は始まっているといえる。たとえば、移動にかかる苦勞が大きければ大きいほど作品への期待も大きくなる。素晴らしい作品に出会ったときの感動は格別だが、逆に大きな失望に到ることもある。簡単に見出せそうな場所なのに作品を見出しつぶくったり、ありふれた場所に意外な仕掛けを見発したりしたときに感興を覚え。『オフ・ミュージアム』での鑑賞とは、美術館では想定されることのない、作品の外部に広がる時間と空間を含んだ鑑賞なのだ。

今回の学生展プログラムで私自身が気になった作品をふりかえってみると、時間の要素を取り入れているものがよい印象を残している。

墓地のある山の上の杉木立の中で作家本人が目を瞑り聴診器を胸に当て黙して立ち続ける作品——後藤友里『遠くからやってくる。~迎えるための準備~』(1)がある。木々の伸び上がるような場所で、同じようにすくと立つ人間の存在感もさわやかだが、何より観客はその地点まで山道を登って来なければならなかつたはずだ。観客自身の呼吸が心拍が上がっている。人は最後の瞬間しか作品として認識していないが、鑑賞体験そのものは山を登る前から始まっていたのだと私は思う。

また道端の井戸に、金属で加工したパイプを回して、汲み上げた水を内部で循環させている佐藤怜『untitled』(2)でも時間は重要だ。見えない水の流れの音は絶え間なく続き、長く繰り返される人々の生活の記憶とともに結びつく。あるいは、街道沿いの電気店にある鏡面の前に立ち止まると、つぶやき声がどこからともなく聞こえてくる原田賀幸『姿見』(3)も、街に流れる公共的な時間が切断され、私的な時間が出現する一瞬を演出していく面白い。また、高校の講堂脇にあるわずか数段のコンクリート階段に木材で風の通り道を作った村上真之介『風に道を用意する／2009の青梅』(4)は、「風」というイメージが時間を喚起するだけでなく、ふだん人が気に留めることもない場のもう1つ美しさを引き出している点で秀逸である。

そのほか、家屋密集地の空き地に無造作に作品を展開してみせた宮本智之『無題』(5)、商業施設のガラス面から外に向けてポエティックな展示を行った八木美由紀『某 Bar にて』(6)、建物と建物の隙間の空間を利用して知覚を問いかけた村山菜々子『バッヂワーク』(16)などが空間の使いに妙味をみせた。一見ふつうのブロック塀だが、人間のようないえない形をしているユモアのある井原宏路『blocken』(7)も笑いを誘う。また、上岡祥恵『そして、夢を見る』(17)は画面を規則的に分割することで環境との関係をうまく作っており、絵画系の展示はどうしても苦戦しがちな中で一つの示唆を与えていたようにも思えた。

このように「オフ・ミュージアム」での鑑賞体験というものは、作品の外延ともいえる時間と空間との関係性が要をなしている。残念ながら制作者の問題意識がそこまで成熟しないままに作品展示がなされているものも多いように思えた。充実した展示を行うには、展示場所の決定を含むプランニングの段階で十分に作品の構想を練らなければ、やはり難しいのではなかろうか。優れた絵画や彫刻を屋外に持ち出せば、そのまま優れた展示になるわけでもない。作品の内部だけで勝負すればよい美術館型作品の論理が非情にも通用しないのが、「オフ・ミュージアム」での鑑賞なのだから。

(たけい・としふみ/府中市美術館学芸員)

